

# 伝文

日本口承文芸学会会報

第5号 1989年9月

発行 日本口承文芸学会  
〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所内川田研究室気付  
電話 03-917-6111 内線 384  
(水曜日午前10時~午後5時まで)

何かを創り出す集団でありたい

会長 川田 順造

日本口承文芸学会はユニークな学会だ。そして好い“雰囲気”をもっている。学会形成には、基本的に二つの原理があるだろう。一つは学問分野（方法論）であり、他は研究対象だ。後者でつくられる学会は、地域学会のように、学際になる傾向がある。前者の、学問分野ごとの学会も、最近は巨大化すると同時に、研究方法や問題の専門化と分化が著るしく、分科会形式などをとらないと、参加者に共通の関心を見だし難くなっている。

私たちの学会の場合、研究対象の共通性が基礎にあるといえるが、その中では専門地域による弱い分化がある。軽度に学際的だが、問題関心の共通性があるために、相互交流が可能だ。あまり対象も方法も同じになれば、学会として窒息するだろう。私たちの場合、会員同士の相違と共通性にほどよい拮抗関係があり、それが和やかさと同時

にある学問的緊張感と刺戟を生み、好い雰囲気を作り出しているのかも知れない。

もう一つの特徴は、国際的な交流が求められる一方で、日本の中でも地方ごとの、地道な研究の集積と互いの交流が大切な学問の学会だということだ。私たちの研究では、村から世界までが、あるいは世界各地の草の根が、ひと続きであり、互いに呼び交わしている。

現代はコミュニケーションのありかたの大きな転換期であり、口頭性と文字性の接点にかかわる基礎研究を行なう私たちが、提起し、論ずべき問題は多い。学会はいわば研究者のギルドだが、内部での切磋琢磨によって何かを創り出すと同時に、外に向かっても開かれた、新しい刺戟を放射する集団でありたいと希うのは、私だけではないと思う。

## 平成元年度日本口承文芸学会大会報告

平成元年度の大会は、6月3日(土)・4日(日)の2日間にわたり、みちのくつつややかな緑の温泉地、山形県南陽市の市民会館を会場にして行なわれた。

初日には、戸川安章氏の「祭文『湯殿山の御本地』」と題する講演をうかがったあと、シンポジウム「日本海文化に於ける口承文芸」が開かれた。パネリストは大友義助・萩原真子・松原孝俊の各氏、司会は大林太良氏であった。

2日目の研究発表会の発表者と題目は次のとお

り。川島秀一氏（憑霊の語りの形成とその伝承）、兵藤裕己氏（物語と辺境 — 安倍氏伝承をめぐる —）、奥田統己氏（静内地方のユーカラにおけるリズムの形式について）、酒井正子氏（歌あそびの場での「うわさ（ゴシップ）歌」について — 奄美・徳之島の目手久集落の事例から —）、浜畑祐子氏（<sup>マ</sup>チャル — イラン昔話のヒーロー —）、宮廻<sup>カ</sup>秀男氏（昔話の空間構造 — 日本とロシア —）、川田順造氏（叙事詩と年代記 — 語られるものと書かれるもの）。

## 眼前の事実

山下 欣一

せまい範囲であるが、南の島を歩いていると、「伝承」という問題を考えさせられることが多い。もう特定の人以外には、いわゆる「話」が聞けなくなってきた。伝承とは、ダイナミックに「話」が口頭から口頭へと伝えられていくことなのだと思う。それでは、全く「話」は死んだのかといえば、そうではない。「昔話」に分類される整った「話」を聞くのは困難だが、「世間話」、「体験談」は、それなりに盛んなのである。

私の担当ゼミで、学生たちに、一番感銘を受けた「話」を報告させているが、その大半は、まず「口裂け女」の話である。今の大学生が小学生時代にこの話は日本全国を席卷しているから、その印象は鮮明なのである。当然、それぞれの地域で変化して話されている。まずは口裂

け女の出自について、草刈り中に誤って自分の口を切ったとか、難産で医者メスの口を切ったというのが代表的である。そして、面白いのは、口裂け女は5人いて、3人は警察につかまされたが、2人は逃げた。好物は黒砂糖だという。次には、深夜ハイウェイをドライブ中、後部座席の学生の足が下からのびてきた白い手につかまれるという話が多い。奄美でも、「ケンモン」という妖怪が深夜自動車運転を迷わす話が多く聞かれるようになった。少し視点を変えてみると、「話」はそれなりに生き生きと話されているのを知ることができよう。

困難な条件もあるが、短絡化を自戒しつつ、眼前の事実としての「話」に目をこらしたいと思う。

(鹿児島県鹿児島市)

## 第2回研究例会 「現代のハナシの世界」

小池 淳一

1988年度第2回研究例会は、89年3月18日に、「現代のハナシの世界」というテーマで開催された。報告者は、常光徹氏「学校の怪異 ― 世間話の諸相と機能」、加藤千代氏「中国農村の世間話 ― 山西省臨汾地区丁村の場合」であった。

ハナシとは魅力的なテーマだ。わたしたちの生活のさまざまな場面の、一方的な電波の横暴やハードカバーに囲まれた活字などにとりこまれぬ弾力のある、ことばの世界。

常光徹氏はまず学校という世界からのことばを紹介してくれた。既に氏の「学校の世間話」が呼び水となってこの世界のことばが意外なほど奥行きと豊かな表情を持つことが知られてきているが、改めてこうして並べられてみると壮観という他はない。トイレという空間が学校の中でどのように語られているか、いくつかのパターンとそれから逸脱していこうとする、ことばのゆらめき。さらに類似の空間としての階段や特殊教室。そこには例えば便所の河童といった古くからの形式がほのかに見え、また現代に無理のない、しなやかな語られかたをしているということがわたしたちを揺さぶる。その背後にはトイレが持っている生理的な特殊性と現代の学校が抱えている矛盾を集約するという象徴的な機能も興味深かった。こうした

怪異は語られるということそれ自体である矛盾を提示し、解決しようとする。解決とはとても思えないような因縁や事故を結びつけることによって、それは行われて、説明されることでなんとか日常に取り込もうとしてもいるのだろう。フロアから武田正氏が農村には便所の幽霊は少ないようだと言ったのは都市的なものの一面を鋭くついた、と思われた。

加藤千代氏は中国山西省臨汾地区丁村から謠言の語られる場とその内容とについて、日本とは違う状況の克明な説明とともに紹介を試みしてくれた。田野調査に日本人がかかわっていくことの困難さはそれ自体新たなハナシを生み出していくかに感じられ、また故事員という語り手の登場は聊天という語で示される場を容容させていくのだろう、と彼の国のハナシの有りに思い至ることができた。また、真人真事（本当の人、本当の事件）という装いはしばしばわたしたちも直面することであり、常光氏の質問に加藤氏が答えた際の、真実

は口コミで伝わるという情報の質への認識とともに比較を可能にするだろうという感想を抱いた。

最後に言わずもがなのことを付け加えるならば、もう少し多くの人々が会場に足を運ぶように、こ

の研究会の場がより活性化するよう会員1人1人が考えてはどうだろうか。この回も参加者は決して多くはない。

〔東京都調布市〕

《仲間たち》

北海道口承文芸研究会

阿部敏夫

1985（昭和60）年の12月に北海道口承文芸研究会が発足しました。北海道という複合文化社会の中に語り伝えられている昔話・伝説・世間話・俗信・ことわざ・わらべ唄などがどのように生き続けているかを、組織的系統的に研究しようという目的のもとに作られました。

現在迄に会員数は90余名にもなっています。地域的にも利尻、遠別、北見、網走、北見、別海、厚岸、釧路、日高、室蘭、函館、江差、小樽、札幌、江別、広島そして本州の方々という具合に、全道にまたがっています。職業も主婦、学生、中高大の教員、農協職員、博物館学芸員・研究員など、幅広い層の人々が参加しています。これらの人々が各地域で“民話集”や“伝説集”“開拓談集”等の編集に携わっています。その成果が“形”となって事務局に届けられています。会員の口承文芸採訪記録集として、“北の語り”（毎年1冊、現在迄に4号発行）が刊行されています。その中には、採訪記録はもとより、資料紹介、論文、評論などが掲載されています。日本海沿岸の古平、山間部の日高町、旭川市などの採訪特集も掲載されています。地域社会形成と口承文芸の関連について研究されています。この他に、今までに発行された資料などが手短かに利用されるようにという意図のもとに、“北海道と「口承文芸」”（現在までに2号発行）という冊子も刊行されています。これらの活動の他に、札幌とその近郊の会員を中心に年4、5回の学習会を開催しています。北海道の口承文芸とは何か？その採訪の仕方などを学んでいます。

今後の課題は、現在は開拓移住民の口承文芸に焦点を合わせていますが、アイヌの口承文芸についても研究していきたいと思っています。また、江差や旭川採訪に会としてとりくんでいます。これらの課題をさらに進めていきたいと思っています。広大な北海道の口承文芸研究を深めるためにも。

（連絡先；〒004 札幌市白石区厚別東4条6丁目3-11 阿部敏夫方）

《こえ》

子どもと昔話

小林美佐子

夜、階段を見上げると、7才の子が半分眠った格好で昔話の本を抱え座り込んでいる。これだけTV、マンガ、ファミコンの氾濫する中で、彼らの生活は寝る直前まで何とも目まぐるしい。「さよならしめん」「べっつに」「まあね」で流されている子が、寝る段になって昔話をねだる姿を見ると、なにやらほほえましい。図書館で本を仕入れて何日間はリアルな長編に埋もれているが、それが尽きた頃にはまたいつのまにか昔話の頁をめくっている。

昔話を聞き語る暮らしが子どもたちの中にあっただのは、この子たちより3世代前位までだろうか。3代前にしても、明治40年代から大正にかけての都市部の子どもたちが、昔話と言ってまず頭をよぎるのは、夜ごと聞く昔話（果してどれだけ聞いたろうか？彼らの夜は？家族はどんな夜を過ごしていたろう）よりむしろ絵本雑誌の粗悪な石版印刷の口絵、教科書の「もも太郎」「ハナサカヂヂイ」ではなかったろうか。土曜会で教わりながら、「塩吹臼」の周辺を調べ始めているが、その絵本雑誌など視覚文化の混入は、一時期一地域に限らないようにみえる。「塩吹臼」『通観』の宮城、福島、愛媛、沖縄に「豚の片髓を投げる」「肉をひきずり込む」「牛肉を臼と交換」など日本の食習慣から異質な要素が散見できるが、明治42年11月発行の「家庭御伽第36編」の「不思議な臼」は、見開き2頁西洋風俗画の絵入りで、本文中に「ハムハム＝豚の髓の肉を燻べて鹽漬にしたものです＝のハム片を投げ」と説明している。目にしうるヨーロッパの「塩吹臼」を並べて見ると、こまかな表現の一致があり、書承性が強いのではないかとも思うが、「不思議な臼」は何か文献の翻訳だろう。豚肉の話が日本の塩吹臼の祖型か例外かまだわからないが、祖型だとすれば、「塩吹臼」の移入が江戸（島本要「日本における『塩吹臼』の形成過程」）をさらに下って、明治のこの時期からという可能性もある。

どちらにしても、3代前の子どもたちにとって、昔話も絵本雑誌も、メンコや石けりと同じ種類の宝物の一つだったのではないだろうか。

（昔話研究・土曜会 千葉県柏市）

新刊リスト

- 日本昔話における「山」 — グリムの「森」との比較において (福山大学教養部紀要・13)  
寺岡寿子 89. (寄贈)
- 仏教と文学 (国文学研究資料館講演集10) 国文学研究資料館 89. 3 (寄贈)
- 国際日本文学研究集會會議録 (第12回) 国文学研究資料館 89. 3 (寄贈)
- 奥三河・花祭と神楽 鈴木道子 東京書籍 89. 5 (寄贈)
- 北海道の「口承文芸」 — 主要資料目録 I 北海道口承文芸研究会 (阿部敏夫) 89. 3 (寄贈)
- 世間話研究・1 世間話研究会 89. 3 (寄贈)
- 奄美のウタシヤの音楽的経歴(1)・(2) (『南日本文化』19・20) 中原ゆかり 鹿児島短大附属南日本文  
化研究所 87. 3 88. 3 (寄贈)
- 雪国の春・14 柳田国男を読む会 87. 10 (寄贈)
- 宇部国文研究・20 宇部短期大学国語国文学会 89. 3 (寄贈)
- 日本民間伝承の源流 君島久子編 小学館 89. 4 (寄贈)
- フィンランドの旅から 米屋陽一 樹と匠社 89. 6 (寄贈)
- 混沌と生成 (都市民俗学へのいざない I) 岩本通弥ほか編 雄山閣 89. 5
- 情念と宇宙 (都市民俗学へのいざない II) 岩本通弥ほか編 雄山閣 89. 6
- 『アイヌ神謡集』辞典 (テキスト・文法解説付き) 切替英雄 北大文学部言語学研究室 89. 6 (寄贈)
- 箱館昔話 (月刊ライフ・創刊1周年企画本) 函館パルス企画 89. 7 (寄贈)
- 昔話と婚姻・産育 (昔話 — 研究と資料-17) 日本昔話学会編 三弥井書店 89. 7
- 民話の手帖・40 (特集, 民話劇) 日本民話の会編 国土社 89. 7 (寄贈)

各委員会担当理事

平成元年3月18日の第17回理事会において各委員会の担当理事が次のように決まった。

会 長	川田順造
機 関 誌	大林太良 大島広志 常光徹 三原幸久 内田るり子
研究例会	野村純一 飯豊道男 伊藤清司
会 計	大島建彦 成田守
庶 務	田中宣一 藤井貞和 中村とも子
口承文芸大辞典編集特別委員会	
	野村純一 白田甚五郎 川田順造 直江広治
監 事	桜井徳太郎 牧田茂
幹 事	間宮史子 丸田雅子
	(各係の最初に記してあるのが委員長)

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金 1,000 円, 年会費 4,000 円。  
入会申込書請求・送金先: 〒114 東京都北区西ヶ原 4-51-21 東京外国語大学アジア・アフリカ言語  
文化研究所川田研究室気付 日本口承文芸学会事務局 (TEL. 03-917-6111 内線 384・水曜日午  
前10時~午後5時まで) 振替: 東京 8-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o Prof. Junzo Kawada, Institute  
for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo, University of Foreign  
Studies, 4-51-21 Nishigahara, Kitaku, Tokyo, ~~160~~<sub>114</sub>, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください